

大阪市立大学 正員 園田恵一郎  
 大阪市立大学 正員 堀川都志雄  
 大阪市立大学 学生員 ○廣瀬 清泰

1. はしがき 鋼板とコンクリート板の合成構造の実例としては、サンドウイッチ床版、覆工板、鋼板張付R.C.床版などが見られる。これらの合成板の力学的问题の一つに鋼板とコンクリート板の接合面での付着应力(直応力とせん断応力)の解明がある。本研究では、鋼・コンクリート合成板を、図-1に示すよう各層ごとに弾性係数が異なる等方性積層板と見なし、それぞれの層に三次元弹性論に基づく厚板理論を適用し、それらの各接合面における変位を連続させ、应力解析を行った。

## 2. 解析方法

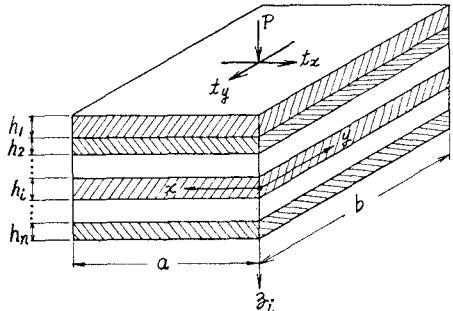


図-1

各層の中央面内にそれをx,y軸、下方にz軸とする。  
 なお、添字iはその層を意味するものとする。いま、その層に対して、Galerkin-Vector  $G_3^i$ , Boussinesqの関数  $\Theta_3^i$  を下記のように与える。

$$\begin{aligned} G_3^i &= \sum_{m,n} \left[ C_1^i \sinh \beta_3^i + C_2^i \cosh \beta_3^i + C_3^i \sinh \beta_3^i + C_4^i \cosh \beta_3^i \right] \sin \alpha_{mz} \cdot \cos \beta_{ny} \\ \Theta_3^i &= \sum_{m,n} \left[ C_5^i \sinh \beta_3^i + C_6^i \cosh \beta_3^i \right] \cos \alpha_{mz} \cdot \cos \beta_{ny} \end{aligned} \quad (1)$$

ここで  $\alpha_m = \frac{m\pi}{a}$ ,  $\beta_n = \frac{n\pi}{b}$ ,  $\beta^2 = \alpha_m^2 + \beta_n^2$ ,  $\sinh \beta_3^i = \coshh \beta_3^i$ ,  $\sinh \beta_3^i = \sinh \beta_3^i$   
 $C_1^i \sim C_6^i$  は上下面での境界条件および各層間の変位応力の連続条件より決定される未定定数である。

各変位を  $G_3^i$ ,  $\Theta_3^i$  で表わせば、

$$2G_i U_i = -\frac{\partial^2 G_3^i}{\partial x^2} + 2\frac{\partial \Theta_3^i}{\partial y}, \quad 2G_i V_i = -\frac{\partial^2 G_3^i}{\partial y^2} - 2\frac{\partial \Theta_3^i}{\partial x}, \quad 2G_i W_i = 2(1-\nu_i) \cdot \Delta G_3^i - \frac{\partial^2 G_3^i}{\partial z^2} \quad (2)$$

$$\text{ここで } \Delta = \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}, \quad G_i = \frac{E_i}{2(1-\nu_i)}, \quad \nu_i: \text{ポアソン比}, E_i: \text{ヤング率}, i=1, \dots, n$$

また、应力は式(2)とHookeの法則により与えられる。

接合面における変位の連続条件式は次のように与えられる。

$$\left[ U_i \right]_{z_i=h_i/2} = \left[ U_{i+1} \right]_{z_{i+1}=-h_{i+1}/2}, \quad \left[ V_i \right]_{z_i=h_i/2} = \left[ V_{i+1} \right]_{z_{i+1}=-h_{i+1}/2}, \quad \left[ W_i \right]_{z_i=h_i/2} = \left[ W_{i+1} \right]_{z_{i+1}=-h_{i+1}/2} \quad (3)_{1,2,3}$$

同様に、应力の連続条件式は次のように与えられる。

$$\left[ \sigma_{xz}^i \right]_{z_i=h_i/2} = \left[ \sigma_{xz}^{i+1} \right]_{z_{i+1}=-h_{i+1}/2}, \quad \left[ \sigma_{yz}^i \right]_{z_i=h_i/2} = \left[ \sigma_{yz}^{i+1} \right]_{z_{i+1}=-h_{i+1}/2}, \quad \left[ \sigma_z^i \right]_{z_i=h_i/2} = \left[ \sigma_z^{i+1} \right]_{z_{i+1}=-h_{i+1}/2} \quad (4)$$

式(3)と式(4)を連立させて、直接未定定数  $C_1^i \sim C_6^i$  を決定することができると、 $C_1^i \sim C_6^i$  の係数行列の次数が大きくなつて、应力の計算には精度が悪くなる。そこで各接合面における应力  $\sigma_{xz}^i$ ,  $\sigma_{yz}^i$ ,  $\sigma_z^i$  を未知数として、変位の連続条件(3)をこれらの未知数で表わし、 $3(n-1)$ 元の連立方程式の解析を帰着させる。紙面の都合より、式(3-3)のみに対する式を示せば、

1) S.Srinivas and A.K.Rao, Bending, vibration and buckling of simply supported thick orthotropic rectangular plates and laminates. Int. J. Solids St. 1970, Vol. 6.

2) 倉田, 園田, 堀川 「鋼・コンクリート合成板の接合面に作用する应力の一計算」昭和51年, 関西支部。

$$\begin{aligned}
& \frac{\alpha_m}{f} X_i \left[ (1-\nu_i) \left( \frac{1}{D P_i} - \frac{1}{D M_i} \right) \right] K_i + \frac{\beta_m}{f} Y_i \left[ (1-\nu_i) \left( \frac{1}{D P_i} - \frac{1}{D M_i} \right) \right] K_i + Z_i \left[ (1-\nu_i) \left( \frac{c t S_i}{D M_i} - \frac{t n S_i}{D P_i} \right) \right] K_i \\
& + \frac{\alpha_m}{f} X_{i+1} \left\{ -K_i \left[ 1 + (1-\nu_i) \left( \frac{1}{D P_i} + \frac{1}{D M_i} \right) \right] + K_{i+1} \left[ 1 + (1-\nu_{i+1}) \left( \frac{1}{D P_{i+1}} + \frac{1}{D M_{i+1}} \right) \right] \right\} + \frac{\beta_m}{f} Y_{i+1} \left\{ -K_i \left[ 1 + (1-\nu_i) \left( \frac{1}{D P_i} + \frac{1}{D M_i} \right) \right] \right. \\
& \left. + K_{i+1} \left[ 1 + (1-\nu_{i+1}) \left( \frac{1}{D P_{i+1}} + \frac{1}{D M_{i+1}} \right) \right] \right\} + Z_{i+1} \left\{ -K_i \left[ (1-\nu_i) \left( \frac{c t S_i}{D M_i} + \frac{t n S_i}{D P_i} \right) \right] - K_{i+1} \left[ (1-\nu_{i+1}) \left( \frac{c t S_{i+1}}{D M_{i+1}} + \frac{t n S_{i+1}}{D P_{i+1}} \right) \right] \right\} \\
& + \frac{\alpha_m}{f} X_{i+2} \left[ (1-\nu_{i+1}) \left( \frac{1}{D M_{i+1}} - \frac{1}{D P_{i+1}} \right) \right] K_{i+1} + \frac{\beta_m}{f} Y_{i+2} \left[ (1-\nu_{i+1}) \left( \frac{1}{D M_{i+1}} - \frac{1}{D P_{i+1}} \right) \right] K_{i+1} - Z_{i+2} \left[ (1-\nu_{i+1}) \left( \frac{t n S_{i+1}}{D P_{i+1}} - \frac{c t S_{i+1}}{D M_{i+1}} \right) \right] K_{i+1} \\
& = 0 \quad (5)
\end{aligned}$$

$$K_i = \frac{1}{2G_c}, S_i = \frac{\partial h_i}{2}, D P_i = S_i \cdot (t n S_i - c t S_i) - 1, D M_i = S_i \cdot (c t S_i - t n S_i) - 1, t n S_i = \tanh S_i, c t S_i = \coth S_i$$

$X_i, Y_i, Z_i$  はそれぞれ  $x, y, z$  軸方向の接合面に作用する応力

$K, X_i, Y_i, Z_i$  が求まれば、 $C_1^i \sim C_6^i$  が決定されて、変位・応力を求めることができる。

### 3. 計算例

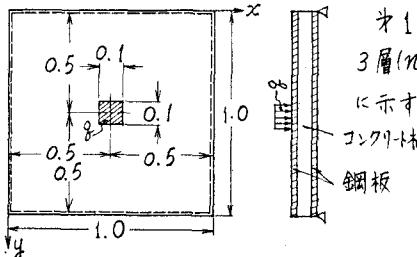


図-2

オ1層目とオ3層目を同一の鋼板とし、オ2層目をコンクリート板とした3層( $n=3$ )よりなるサンドウィッチ板について数値計算を行った。荷重は図-2に示すような部分荷重とし、各諸元は表-1を示す通りである。

表-1

層	諸元	板厚 $h/a$	ヤング係数比	ポアソン比
オ1層目・3層目	$0.002 \sim 0.008$		7.0	0.3
オ2層目	0.1	1.0	0.1667	

以下の図-3, 4において薄板理論によるものは細線で表わす。

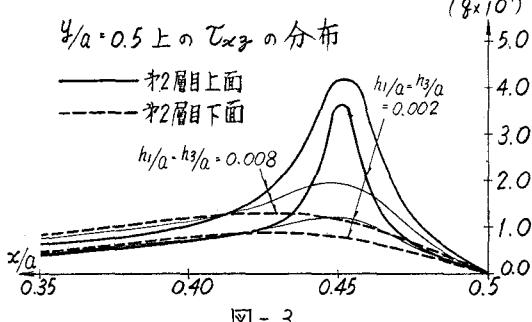


図-3

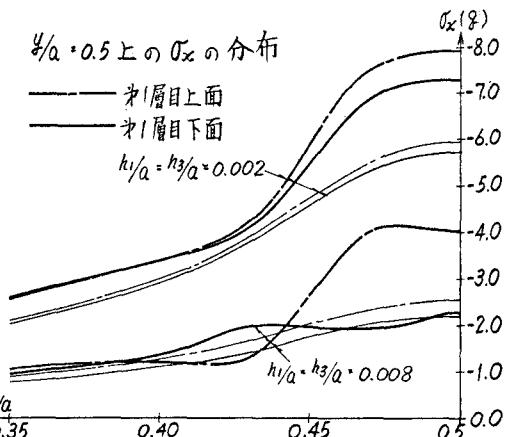


図-4

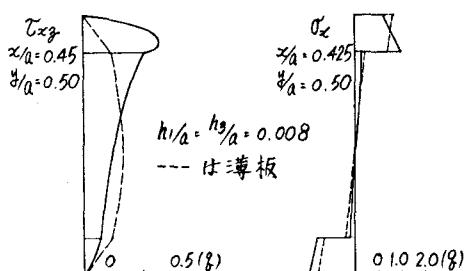


図-5 鉛直方向の応力分布

### 4. あとがき

本研究は、種々の境界を有する矩形板の解析にも適用できるものと思われる。また、上記数値計算より、薄板理論による結果と本研究による結果とは、応力の分布状態にかなりの相異が見られる。